

大学における留学生支援に関する社会的研究

—九州大学の留学生サポートチーム制度を事例に—

キーワード：留学生受け入れ、留学生支援、留学生支援体制、留学生支援者、サポートチーム制度

人間共生システム専攻
巖 璐

1 問題と目的

世界的な動向として留学生が増加している。日本においても、留学生の受け入れ数が年々増加している傾向が示されている。

量的増加に加えて、留学生の出身国の多様化もまた、グローバル化の進行に伴う現象の一つとして注目すべき点である。日本で学ぶ学生に関して言えば、アジア出身者中心、大都市・大規模大学への集中、国立大学には大学院生の在籍者が多く、私立大学においては学部生が中心（馬越 1991）といった全体像は、現在まで大きく変化していない。

積極的な留学生受け入れ政策がとられている一方で、そのための環境整備がスムーズに進んでいるのであろうか。そこで留学生の受け入れを拡大するのに伴って、必要な支援体制とはどのようなものであるかを検討する必要がある。また、多様化する留学生のニーズに対応する留学生支援体制を構築していくことは、今後留学生に対する支援を議論する際に重要な課題となる。

留学生支援の担い手には立場の異なるさまざまな人がいる。それぞれが特徴ある異なる役割が期待されており、協力して留学生が抱える問題に対応している。本論文では様々な留学生支援の担い手の中で、支援を受けた経験のある留学生が、留学生に対して支援を提供する役割に注目したいと考える。留学生にとって、同国の留学生同士が一番気軽に相談しやすいと思われるが、実際に支援する場面で何が問題とされるかについて検討する。

2 方法

本論文では、2018年9月から12月にかけて7名の留学生を対象に実施したインタビュー調査を分析対象とする。この7名の留学生はすべて大学で留学生として支援を受けた経験と留学生サポーターの経験を両方持っている。この7名への一連のインタビューは、半構造化面接という方法を使用している。あらかじめ質問項目を書い

た紙を渡し、それに即して対話で質問をしていく。面接者はメモを取りながら聞く形を取っている。面接時間は1人約1時間である。インタビューは全て中国語で行った。留学生が最初に大学に入って、支援を受ける時期から現在に至るまでの経緯、留学生の支援を受けている時と支援を提供している時の変化、ポジティブとネガティブな体験、支援双方のコミュニケーションの困難と工夫、付き合いの頻度などの質問項目を設定した。

3 結果

この節では対象者の属性の分類に基づいた考察を行った後に、調査から見出されたサポートチーム制度の問題点についての考察を行う。

まず、対象者の属性の分類に基づいた考察に関しては、日本語学科出身かそうではないかという属性を用いる。これを利用したのは、言語運用能力という要素は、留学生の生活のなかで重要な影響を持っていると考えるからである。言語が通じるか否かによって、支援のあり方やサポーターに求めることにも影響を与えるだろう。学生A、C、E、Gは日本語学科の留学生であり、学生B、D、Fが日本語学科ではなく、それぞれ日本語以外の専攻をもつ留学生である。以上のことを踏まえて、日本語学科の専攻の学生と日本語学科ではない留学生に分けて考察をしている。

さらに、調査から見出されたサポートチーム制度の問題点を3点に整理し、それぞれについても考察を行った。

サポートを受ける側にとって、時期ごとのニーズの変化を重要視すべき点と留学生自身の意見を反映する場を作る点が重要であるという結果が得られた。また、サポートを提供する側にとって、サポーター同士の交流を重要視すべきであるという結果が得られた。

4 考察

この章では対象者の属性の分類に基づいた考察を行った後に、調査から見出されたサポートチーム制度の問題

題点についての考察を行う。

まず、対象者の属性の分類に基づいた考察に関しては、日本語学科出身かそうではないかという属性を用いる。これを利用したのは、言語運用能力という要素は、留学生の生活のなかで重要な影響を持っていると考えるからである。言語が通じるか否かによって、支援のあり方やサポーターに求めることにも影響を与えるだろう。学生 A、C、E、G は日本語学科の留学生であり、学生 B、D、F が日本語学科ではなく、それぞれ日本語以外の専攻をもつ留学生である。以上のことを踏まえて、日本語学科の専攻の学生と日本語学科ではない留学生に分けて考察をしている。

さらに、調査から見出されたサポートチーム制度の問題点を 3 点に整理し、それぞれについても考察を行った。

4.1 日本語学科出身の留学生についての考察

日本語学科出身の留学生のサポートチーム制度に関する意見を考察する。

学生 A は、「自分は中国で日本語学科に在籍していたので、語学面の困難をあまり感じていない。しかし初めて日本に来て、やはり同じ国の学生の方が、自分の状況を分かってくれると思った。」と語っているように、日本語能力がある程度あっても同国人サポーターによる支援が必要であると感じた。また、A は専攻を学ぶ上で言語面に不安を感じていたが、同じ状況を経験したことがあるサポーターと不安感を共有できたことを評価している。こうしたことを考えると、同じ国のサポーターの方が効果的な支援ができると思われる。同様に学生 G は、「私が日本に来たばかりの頃、同じ中国出身のサポーターに入寮の手続きや国民保険の加入などに協力してもらった。」と語っていた。

学生 B の語りからは、A とは異なり、学生 B は京都の日本語学校に通ったことで、日本での日常生活に関して問題と感ずることが特になく、言語面の不安は感じられなかった。学生 C も日本語学科の出身であるためか、日本語能力に関して不安を抱えている様子は見られなかった。学生 C は個別の支援と時間調整の問題を指摘していて、言語面の心配は見られなかった。彼らからは、日本語能力がある程度あるためか、同国人サポーターによる支援に対して特別肯定的に評価する語りを得られなかった。

学生 E の場合、「私の性格が独立的で、いちいちサポーターに聞かなくても、なんとなく自分で解決することができると思う。サポーターを頼りすぎると、自己成長ができなくなると思う。」と語っていた。学生 E は自己

成長を重視し、留学によって得られる成長や、日本語能力の向上、日本文化理解の深化を目標としていた。そのため、同国人サポーターによる支援に価値を置いている様子はなかった。

日本で留学生生活を送るにあたって非常に重要だと思われる日本語能力は、支援の中でどんな影響を示しているのかを見てきた。日本語学科出身の対象者の語りから見えてくるのは、日本語能力をある程度身に着けている場合、同国人サポーターによる支援がいつも効果的、あるいは留学生のニーズを満たすわけではないということだ。確かに、学生 A のように、日本語能力があっても初めての日本での生活には不安を覚える学生も多いため、同国人サポーターによる支援を必要とする場合もある。しかし、今回の調査は、ある留学生にサポーターを割り当てるとき、単に同じ国の出身で、コミュニケーションもスムーズであり、孤独や不安などを共感しやすいであろうという理由だけで、同じ国出身のサポーターを割り当てることに慎重になるべきであるということを示唆しているのではないだろうか。

4.2 日本語学科以外の留学生

学生 D、学生 F は日本語学科出身の学生ではないため、日本語能力は日本語を専攻していた学生より高いとは言えない。学生 D は「日本に来た当初は分からない事が多かったため、サポーターに様々なことを教えてもらって非常に助かった。日本語を勉強したことがなく、簡単な挨拶しかできなかつたため、最初は日本人のサポーターではなくて良かったと思う。」といった語りがあった。日本語が堪能ではなかつたため、同国出身のサポーターが配置されたことは効果的であった。また、学生 D は専攻分野について情報がほしいが、「専攻に関することについては、サポーターに尋ねても分からなかつたため、教員や先輩に聞くことにした。私の場合は、研究室に同じ国出身の先輩がいて、意見を聞くこともでき、非常に助かったと思った。」と話した。留学生 F にとってのサポーターは「中国語で直接話ができて、はじめての留学生生活にとって心強い存在」であった。

学生 D と学生 F は、日本語が日本語学科の学生のように堪能ではないから、日本に来た当初は日本人ではなく、同国人のサポーターが良いと思った。

4.3 調査から分かったサポーターチーム制度の問題点

サポートを受ける側にとって、時期ごとのニーズの変化を重要視すべき点と留学生自身の意見を反映する場を作る点が重要である。また、サポートを提供する側にと

って、サポーター同士の交流を重要視すべきである。以下にそれぞれについて考察をしていく。

4.3.1 支援の初期集中とニーズの変化

留学生活の初期は、新しい環境に対する心配、複雑な手続きなど様々な問題が発生する可能性があり、支援が主に最初の時期に集中しがちである。実際、大学や担当教員によって示されるサポーターにしてもらいたいことのほとんどは、初期に行うべき内容である。支援活動が行われる初期に、手続きの協力など基本的なことはほとんど終わってしまう。実際、学生 G の語りから、最初はサポーターに協力してもらったが、「手続きに同伴することを面倒くさいと思うのか、学業やバイトが忙しくて時間調整が難しいのか、理由よく分からなかったが、とにかく基本的に会えなかった。聞きたいことがあるとメッセージを送信したが、時には返事もしてもらえなかったこともあった。不満と思っても教員に言う必要はないと思って、連絡を取らないことにした。ルームメイトがいて、何かあったら彼女のサポーターに聞いてもらった。」ということが聞き取れた。このように、手続きなどの支援さえ終わってしまえば、その後は積極的な支援を受けられないこともあった。

しかし、時間が経つにつれて留学生のニーズもだんだん変わってしまうことも考慮に入れなければならない。初期は支援を行う時期として非常に重要であるが、初期を重視する一方、支援時期の変化に注目しないといけなのではないだろうか。九州大学のサポートチーム制度はサポーターによる支援を3ヶ月の期間をしている。長い時間とは言えないが、時期の変化はやはり無視できない。例えば、学生 A は、「自分と同じ出身国の友人は作るが、時々、共感し過ぎて、外国で生活することで得られる成長があまりないと感じる。具体的に言えば、同じ国の学生がサポーターだから、自分達の国の人の視点で日本文化を見てしまう。さらに、同じ国の学生と仲が良くなると、日本人グループに入りにくい気がする。最初は同じ国の学生によるサポートに安心感を覚えたが、時間が経つにつれて日本人のサポーターとの交流が欲しくなる。」という語りが得られた。この語りから、留学生の生活への適応段階に応じて、支援の担い手、あるいは支援のあり方をだんだん変えていく必要があることが示唆された。

また、学生 D が「サポーターの経験を通して、友達作りができて本当に良かったと思う。

そして、自己成長にもつながった。サポーターとしてサポートが求められるのは、ほとんど同じ国の人に対す

るサポートで、文化や言語といった共通基盤があるから、サポートするのはそれほど難しいとは思わなかった。しかし、サポーターとして他の国の留学生と接触する機会がほとんどなく、もしこの点が改善すればサポーターの経験に対する満足度はより高くなると思う。」という話があった。サポーターとして他の国の留学生との交流の気持ちがはっきり示された。

もう一つの事例から見て、学生 F は日本に来る前、サポーターと WECHAT を交換していて、中国語で直接話のできたので、初めての留学生活にとって心強い存在となったと思った。これに加えて、「初めて日本に来たときは、中国のサポーターがいて安心だと思ったが、日本文化を知りたいという気持ちも強いので、もし日本人のサポーターから支援があったらいいなと思っていた。」という話があった。同国人による支援に対する安心感は日本に来た最初に示されたが、支援活動が進む中で、それに加えて、日本文化を知りたい気持ちが強く、日本人によるサポートを求め始めたことが示された。

このように留学生の中には、様々な国の人との交流を求めている人がいる。また、その交流によって、自己成長にもつなげたい留学生もいる。最初の時期は、手続き等が優先されるが、その後の支援は留学生ごとにサポーターに対する要求や期待がそれぞれ違ってくることが少なくないはずである。

このように考えると、時期に応じて支援活動を行うことは、支援効果を持続させることにつながるのではないだろうか。従来、オリエンテーションなどで教員から示された支援内容は初期のものに集中していたため、それを終えると、支援に対して受動的になるサポーターが多かった。しかし、時期に応じてニーズが異なることをサポーターが認識すれば、積極的に支援に関わるようになる可能性もある。

4.3.2 「チーム」の形骸化

サポーターに関する制度の全体の枠組みから見ると、サポートチームが一つのチームとして活動しているが、サポーター同士がお互い交流することはなかったのが現状である。担当する留学生がすでに大学から決められているから、オリエンテーションの中で知り合いがいても交流の必要性を感じず、支援活動について交流していない人が多いだろう。サポートチームの中で、交流する場が作られていないのが問題である。担当が決められているから、サポートチームはいくつかのグループに分けられ、それぞれの支援を行う形になってしまう。

学生 D は「自分が留学生として支援を受けた時、他の

サポーターや彼らが担当した留学生と会う機会が一度もなかったため、教員の依頼によって自分がサポーターになって初めて、サポーターはチームとして支援を行っているのだと分かった。それくらい一緒に交流する機会がなくて、会える場もないので、他の新入留学生と交流できるチャンスを増やせばいいと思う。それに加えて、僕が他のサポーターとも会う機会がほとんどなかった。日本人のサポーターはもちろん、同じ中国出身のサポーターもなかなか会う機会がなかった。」という語りが得られた。サポートチームは交流できる機会がなく、会える場も設置されていないため、改善すべき点として挙げられた。

留学生サポートチームとして呼ばれているが、チームとしての要素は確認できなかったのである。サポーターそれぞれが留学生支援活動をしているが、お互い支援の話を共有する機会がないのは、問題である。

4.3.3 留学生の意見を反映する機会

サポートチーム制度を利用したあと、留学生の利用に関する意見を反映できる場が設けられていないのは問題だと考える。留学生サポーターの活動をある程度に反映できる報告書があるのだが、留学生本人の意見などを何らかの形で反映できる手段ははっきりしていないのは問題視すべきだと思う。留学生はサポートチーム制度の利用者なので、利用者の意見を反映することが重要視されるべきなのではないか。

学生 C は時間調整の問題を指摘していて、調査では「私のサポーターは三人の留学生を担当していて時間調整が難しく、時間を調整できなかった場合、問題があっても自分で解決した」ということが分かった。その時間調整に対する不満は、大学や教員側に反映できていなかったままになっていた。また、学生 G は自分のサポーターに対して不満を持っていて、その不満を誰かに反映したらいいか、また、不満を気軽に言う場はないと感じていて、結局不満を持ったまま支援活動が終了した。

留学生 C と G は不満を持っているが、その不満を話しやすいと思った場はなく、支援活動の質は悪いままであった。

主要引用文献

- 浅野慎一, 1997, 『日本で学ぶアジア系外国人——研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版社。
権藤与志夫・白土悟, 1998, 「外国人留学生の学習と生活に関する諸問題——九州地区国・公・私立大学における質問紙調査報告」『比較教育文化研究施設紀要』39: 69-98.

- 水野治久・石隈利紀, 1998, 「アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究」『カウンセリング研究』31(1): 1-9.
村田雅之, 1996, 「チューターの援助と仕事観」『飯山論叢』13(2): 49-76.
———, 2006, 「留学生支援ボランティアの役割と現状」『広島大学留学生センター紀要』6: 63-77.
———, 2009, 「留学生 30 万人計画を視野に入れた留学生支援ボランティアの活用」『大学教育研究紀要』5: 3.
———, 2013, Establishing and Managing the Subject " International Student Support Volunteer Practice " 『大学教育研究紀要』7: 1-16.
岡益己・深田博己・周玉慧, 1996, 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』27: 25-49.
白土悟, 2010, 「大学における留学生支援体制の再考」『留学交流』22(4): 2-5.
白土悟・権藤与志夫, 1991, 「外国人留学生の教育・生活指導における現状と課題——大学教員及び事務職員層に対する質問紙調査報告」『九州大学比較教育文化研究施設紀要』42: 97-119.